慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	山崎功著 パルミーロ・トリアッティ：その生涯と業績
Sub Title	
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1966
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.59, No.1 (1966. 1) ,p.106(106)- 107(107)
JaLC DOI	10.14991/001.19660101-0106
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19660101-0106

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新刊紹介

山崎・功著
『パルミーロ・トリアッティ
――その生涯と業績――』

現在、国際共産主義運動はその運動はじまって以来最大の危機に遭遇しているといわれる。中国とソヴェート連邦との論争が、たんにイデオロギー的な論争の段階にとどまらず、両国の国家的な利害の対立にまで発展しつつあることは重大である。世界各国の共産党はこの論争を契機として、二つに分裂し、大体において西ヨーロッパの共産党は、アルバニアを除いてはソヴェートを支持し、アジア諸国の共産党は、中印国境問題以来ソヴェート支持にまわったインド共産党を除けば、大体において中国の立場に立っている。日本共産党もその例外ではない。この間にあって基本的にはソヴェートを支持しながらも、中国共産党を理解し、論争を通じて共産主義の理論の発展を深め、その団結を強固なものにしようという態度を一貫して保持しつづけたのは、パルミーロ・トリアッティのひきいるイタリア共産党であった。一八六四年八月、トリアッティは、中ソ論争にかんする有名な政治的遺書を残してヤルタにおいて客死したことはよく知られているが、この度、山崎氏によって、トリアッティの伝記が完成されたことはまことに意義深いものがある。つぎのような内容から成っている。

Ⅰ最高の思想家・文化人、Ⅱ新しい変革の世界観へ、Ⅲ社会党への参加、Ⅳ工場協議会運動と『オルディネ・ヌオーヴォ』紙、Ⅴ工場占領とイタリア共産党の創立、Ⅵファシズムの暴風のなかで、Ⅶ共産主義インターナショナルの旗のもとに、Ⅷ反ファシズム統一人民戦線と反戦平和闘争、Ⅸスペイン内戦、Ⅹ第二次世界大戦、Ⅺ統一政府実現と社会主義文化の問題、Ⅻトリアッティ襲撃事件、XⅢソ連第二〇回党大会とスターリン批判、XⅣ社会主義へのイタリアの道、XⅤ情勢の具体的分析と新たな多数派、XⅥ平和と統一のために。

目次をみれば明らかなように、この著作は、たんなる指導者の伝記ではなく、あくまでもイタリア共産主義運動を通じてみた偉大な個性の歴史であり、逆にトリアッティという指導者を語ることはまたイタリアの社会運動を語ることにほかならないことを示している。

山崎氏はすでにイタリア社会運動史研究の権威であり、まさしくこの人によって、トリアッティの伝記が書かれたことは至当であるが、ともかくこの書を読み終って感ずることは、イタリア人民が、いかにすばらしい指導者をもっていたかをしみじみと感じさせることである。アントニオ・グラムシとならんで共産党創立に参加し、一九二〇年代におけるトリーノの工場占領と大ストライキのなかで、マルクス・レーニン主義を体得し、やがてファシズムの嵐のなかで全民主戦線の統一のために全力をつくし、二〇年代においてはファシストと社会民主主義者とを区別せず、社会ファシストとして同列視し攻撃するという誤謬をおかしたにしても、やがて三〇年代においては、ファシズムの新しい攻勢にたいして、共産主義インターナショナル第七回大会の方針、すなわち、「労働者階級、勤労者、あらゆる民主的・進歩的勢力の統一のための闘争」にそって、労働者階級の統一戦線、それは具体的には一九三四年フランスで実現されたイタリア共産党とイタリア社会党との間の行動統一協定となって結実した。

豊富な本書の内容について詳細に論ずる余裕はないが、トリアッティの偉大さは、第二次世界大戦中と戦後の共産党の政策のなかに遺憾なく発揮されたものといえよう。とくに戦後、国民的統一のあとで、国民の要望と共産党の方針に従って、トリアッティは、第二次バトリオ内閣第一次および第二次ボノーミ内閣、フェルルッチョ・パルリ内閣、第一次デ・ガスペリ内閣に、それぞれ無任所大臣、副首相、司法大臣をつとめ、この統一政権は、デ・ガスペリ首相のアメリカの援助受けいれ、左翼政党との絶縁までつづけられたのであって、このような点に、われわれは、いかにも全国民が総力をあげて独立と平和を獲ちとった国の共産党の自信と寛容をみることができるのである。社会主義への「イタリアの道」は、そのような豊かな歴史的体験ときびしい実践と理論との統一、柔軟な政策によってはじめて構想されうる所以であろう。

トリアッティというすぐれた人間、卓越した指導者を知るばかりでなく、イタリアの社会主義運動を研究し、わが国の共産主義運動を理解するためにも、本書の一読を学生諸君におすすめする。（合同出版社・一九六五年八月刊・B6・三二〇頁・八〇〇円）

――飯田　鼎――

＊　＊　＊

湯村武人著
『フランス封建制の成立と農村構造』

封建制成立の指標は何か。著者の関心の第一はそこにある。これと関連し最近のフランス学界は城主層の果した役割を強調した。著者もまたこの線に沿い、考察を進める。そして封建制の成立を、荘園大領主の地方支配の組織が下僚の城主層に移り、その下で再編された結果とみた。時期的には十世紀末のことで、この過程を通じ支配は極度に狭い範囲を単位に構築されることになった。城主はかかる支配単位の頂点に立ち、農村支配の実質的な担当者として権勢を振うことになった。著者は城主の経済的実力の向上のなかに権力の分散が達せられたと説く。従ってそれはまた領主権力の弱体化の過程でもあるわけだが、そうしたなかで城主が権力を増し得た事情はともかく、問題はその時、農村支配の体系に封建制として自由な契約を基礎とする関係が打ち出されなければならない理由にあった。それより以前の支配の仕組みをめぐって著者は、奴隷制を強調する立場を批判しながら議論を進める。重要なことは、私見によれば、荘園経済で重点を直営地に置くかどうかにあった。直営地を重視する場合、支配の本質は奴隷制といわざるを得ない。しかし逆に、保有農支配の面からは、前説に組することはできないとするのが妥当であった。従って荘園支配の本質はにわかに規定し難い。著者はフランス学界の諸成果が領主経済との関連で夫役の持つ意味を重視していないことから、奴隷制に傾くわけであるが、荘園経済でそれほど直営地依存度を絶対視するのもいかがなものか。保有農に対し金銭納付を要求する程度が高まって来た事実を思う時、それでもなお直営地を重視し、奴隷制支配を強調しなければならないのか。

今や支配組織の変化は明白である。この時期にはまた経済的環境も変貌を続けた。変貌は農村の繁栄のなかで起った。農業技術の改善は大きな意味を持つ。こうしたなかで三圃制輪作方式が本格化していった。著者の関心の第二は下部におけるかかる発展の解明にある。著者はこれを果すためフランス学界の諸成果を刻明に追う。記述は有益である。結局問題はまた、そうした発展に照応した時、支配の仕組みが自由な契約を基調とする封建制のそれでなければならない事情であろう。これについて著者は保有農の経済を把握すること